日吉台地下壕保存の会会報

第１４１号

日吉台地下壕保存の会

「ひと」から「ひと」へ

会長　阿久沢　武史

第 27 回横浜・川崎平和のための戦争展が、11 月 29・30 日の両日、慶應義塾大学日吉キャンパスで行われました。今年のテーマは「少年・少女と戦争」、私たちは参加４団体の一員として、これまでの調査や聞き取りの成果を発表しました。幸い好天に恵まれ、銀杏並木の美しい黄葉の中、大学生を含む多くの皆様にご来場いただきました。

恒例の「若者の発表」は、日吉台中学校演劇部による朗読劇と慶應義塾高校 3 年生による研究発表でした。ステージいっぱいの中学生による臨場感あふれる朗読劇は、戦後の焼け跡に生きた戦争孤児の体験を再現したもので、空襲の中で家族を亡くし、差別や孤独を強いられた子供たちの苦しみを伝えるものでした。高校生の研究は、慶應のカレッジソングを通して戦争の時代の教育のあり方を検証したもので、自分の学校の過去と現在を往還しながら、「いま・ここ」で学ぶ自分自身の足元を見つめるものでした。戦争孤児の方々の記憶や証言、歌い継がれるカレッジソング、学徒出陣壮行歌や軍歌、これらはすべて「ことば」です。残されたことばに真剣に向き合い、自分たちなりに吟味し、それを一生懸命伝えようとする姿勢こそ、「継承」という語の本当の意味ではないかと思います。

小川万海子さんの講演もまた、「継承」への強い意志を感じるものでした。駆逐艦「雪風」乗組員としてマリアナ沖海戦から沖縄水上特攻に至る連合艦隊終末期の絶望的な戦いを経験された西崎信夫さんのお話を、私は二度お聴きしたことがあります。小川さんが西崎さんの体験をまとめた『「雪風」に乗った少年――十五歳で出征した「海軍特別年少兵」――』は、若い世代の人たちに是非読んでほしい本です。沖縄水上特攻の激しい戦闘の中で、西崎さんは機銃台の射手としての任務につきました。敵の大編隊が来襲し、一機のグラマンが一直線に突っ込んできました。敵の弾丸がすべて自分に当たるような激しい恐怖の中で、夢中で撃ち返した時、突然開き直り、その瞬間それまでの恐怖が殺意に変わり、弾を撃つことに快感さえ覚えるようになったそうです。「死神が私から離れると同時に、私は人間でなくなっていた。」その時の自分を西崎さんはこのように語っています。

これは十代の少年の身に絶対に降りかかってはいけないことであり、私たちの感覚では間違いなく異常な体験です。しかしながら、そうした異常が、現在この瞬間でも日常化している国や地域が世界に存在しているということも疑いのない事実です。このような現

【目次】

巻頭言【1-2p】「ひと」から「ひと」へ　会長　阿久沢武史

報告【2-5p】第 27 回横浜・川崎平和のための戦争展＜少年・少女と戦争＞

☆報告とお礼　副会長　亀岡敦子

☆朗読劇　焼け跡に生きる　戦争孤児たちの記録　横浜市立日吉台中学校演劇部

☆塾歌から見る教育理念　慶應義塾高等学校 3 年生　酒井俊雄

☆小川万海子さんの講演「雪風に乗った少年」をきいて　ガイド　佐藤由香

お知らせ【6p】第 14 期ガイド養成講座始まる　運営委員　小山信雄

連載【7-11p】

☆第一校舎ノート(17)世界地図のカップ（1）　会長　阿久沢武史

☆地下壕設備アレコレ(26) 海軍特信班大和田通信所跡を見学しました　運営委員　山田　譲

☆海外戦跡めぐり(13)タイの戦勝記念塔　運営委員　小山信雄

聞き取り【12-14p】山の手大空襲と戦時中の体験　運営委員　山田　譲

港北今昔こぼれ話【14-15p】慶應日吉ｷｬﾝﾊﾟｽを接収したアメリカ軍　副会長　亀岡敦子

活動報告【16p】2019 年 10 月～2020 年 1 月

実の中で、私たちが、とりわけ若い世代の人たちが、過去の戦争を「いま」を生きる自分自身の問題としてとらえることの意味は重いと考えます。戦争孤児の体験を現代の中学生が語るように、戦時中の大学生の思いを後輩である現代の高校生が語るように、西崎さんの体験を小川さんが語るように、記憶や経験を「ひと」から「ひと」につなげる時、国家や主義や宗教を超えて、現在進行形の問題を自分の問題として考える窓が開かれると思います。

新しい一年を迎えました。本年も会の活動へのご理解とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

報告　第 27 回横浜・川崎平和のための戦争展 ≪少年・少女と戦争≫～戦争遺跡から見えてくること～

☆報告とお礼

副会長　亀岡敦子

2019 年の 11 月 29 日（金）、30 日（土）の 2 日間、第 27 回横浜・川崎平和のための戦争展が、慶應義塾日吉キャンパス来往舎で、黄金色のイチョウが散るなか開催されました。来往舎は日曜日には正面入口から入館できないのですが、これまで不自由なまま日曜日に、若者の発表と講演会を行ってきました。今年はそれを土曜日に設定し、展示は金曜日と土曜日の 2 日間としました。また、テーマを「少年・少女と戦争」とし、戦争は少年少女を巻き込み、運命を狂わせ、時には命さえ奪うことを、知ってもらえるような内容を加えました。イベントテラスでの展示に関しては、各団体ともに長年取り組んでいる活動に加えて、少年少女が戦争に巻き込まれた側面を付け加えました。

若者の発表に関しては、今年も感動的でした。日吉台中学校演劇部部員 30 人による戦争孤児を扱った朗読劇と、慶應義塾高等学校生酒井俊輔さんのカレッジソングの歌詞から、慶應義塾の教育理念の変遷を読み解く報告です。若い人たちが、自分と近いところに題材を見つけ、戦争を知り、伝えようとする姿勢に未来を感じました。

また、小川万海子さんによる講演【ある海軍特別年少兵の生き抜く力　『「雪風」に乗った少年』を語る】は、14 歳で海軍に志願した西崎信夫さんについてのお話でした。当会でも数年前に講演していただいたので、感慨深いものがあります。最後に 4 団体がそれぞれの活動や現状について報告し、盛会のうちに会を終えることができました。

この横浜・川崎平和のための戦争展は、日吉台地下壕保存の会が発足して数年たったころ、「日吉台地下壕と登戸研究所」という地域に残る戦争遺跡をひとりでも多くの人に知ってもらいたい、という思いから実行委員会方式で始めたものです。サブタイトルは毎回「私の街から戦争が見える」とし、横浜と川崎の交互開催としました。経費に関しては、会員の皆さまや友人たち、そして自分たちの賛助金をあてました。誰の指示も受けずに企画し、実施してきました。多くの魅力的

な方々の講演会やシンポジウム、プロの俳優による朗読、若者たちの生き生きとした報告などです。

27 回目の今年も、多くの賛助金をいただきました。おかげ様で有意義な展示や講演を開催することができましたことを、深く感謝いたします。

☆朗読劇　焼け跡に生きる　戦争孤児たちの記録
～戦争の惨禍を語り継ぐ～　横浜市立日吉台中学校演劇部

横浜市立日吉台中学校演劇部指導員　脚本・構成・演出：　山田容弘

日吉台中学校演劇部は、この三年間、平和のための戦争展 in よこはまに参加させていただいています。横浜大空襲の惨禍を朗読劇の形で上演して参りました。**戦争の実体験のない私たち**にとって、当時の惨状を実感することはかなり難しいことですが、語り継いでいくことが私たち次の世代がやらなくてはならないことだと考えています。**朗読劇の形式**をとっているのは、演じることで、ほんのわずかでも体験された方の気持ちを感じることができれば、という思いからです。私は足かけ１０年、朗読劇を上演させていただきましたが、常に一般市民の目線で戦災を捉えることを意識してきました。記録にも残らない、英霊として祀られない、戦災に遭った人々の証言を語り継ぐためです。

今回の作品作りのきっかけは、本校が創立７０年を迎え、新学校制度が開始、本校創立の１９４７年の世相を調べたとき、まだ**「浮浪児」の「狩りこみ」**が行われていたことを知り、戦後教育の一歩を踏み出しているときに、一方で**戦争孤児**のことが忘れられているとの思いを強く持ったことです。そこで、焼け跡の中に多くいたと思われる戦争孤児に注目して、戦争孤児をテーマに朗読劇に取り組むことにしました。

そうした折り、１冊の本に行き当たりました。自身が戦争孤児である、**星野光世さんがまとめた「もしも魔法が使えたら　戦争孤児１１人の記憶」（講談社）**です。星野さんを初めとする１１人の孤児体験のお話です。ここに、戦争孤児の実態の一端が見えます。厳しく、悲惨、そして悲しい体験です。そしてそこに多くの大人たちが、孤児を差別したり、およそ人間扱いしなかったことが語られています。「火垂るの墓」の作者野坂昭如が「戦争は最も弱い者が犠牲になる。二度と飢えた子どもの顔を見たくない」と述べていました。　戦争孤児の方たちは、辛い境遇におかれたにもかかわらず、なぜ差別されたのでしょうか。戦後間もない混乱期とはいえ、戦争で親を失った何の落ち度もない子どもたちをゴミのように扱った事実。この戦争孤児の方たちに対する差別などは、現在の状況とも繋がっている。そんな差別をしたことを忘れ、同じ事を繰り返しているのではないでしょうか。日本は何も変わっていません。進歩もない。さて、今回の上演にあたり、生徒たちは一生懸命取り組んでくれました。知らない時代の話を、想像力を目いっぱい駆使して、理解と表現に努めました。

戦争のことは風化の一途をたどっています。しかし、微力ながら、この活動を続けることで、少しでも語り継ぎ、風化に歯止めをかけ、次の世代、とりわけ若い世代に引き継ぐことができたらと思っています。

子どもたちに発表の場を提供くださり、またご覧いただいたことに感謝いたします。

日吉台中学校演劇部による朗読劇

☆塾歌から見る教育理念　―「慶應義塾の理念」は保持されたのか―

慶應義塾高等学校３年　酒井俊輔

慶應義塾高校生による研究報告

慶應義塾には、多くのカレッジソングが存在する。校歌にあたる「塾歌」や、第一応援歌の「若き血」を始め、その数は実に50曲以上を数える。それらのカレッジソングには、その曲が発表された時代背景や、当時の教育理念が顕著に表れているため、慶應義塾が置かれていた状況を知る手掛かりとなる。今回の発表では、カレッジソングの歌詞に注目し、慶應義塾の教育理念の変遷と戦争が与えた影響について考えた。

戦前に発表された「慶應義塾之歌」と「塾歌(旧)」の歌詞には、「独立自尊」や「気品の泉源」など慶應義塾の創立者である福沢諭吉の教育理念を直接的に表す言葉が多用されている。また、現在でも歌われている「塾歌(新)」では、前述の2曲とは異なり直接的な表現ではないが、歌詞中に「愈極而愈遠」などの福沢諭吉の思想を間接的に表す言葉が使用されている。また、3番の歌詞「徽章の誉」は、当時の塾長であった小泉信三の教育理念（「塾の徽章」などの訓示）を踏まえている。このように、戦前に発表されたカレッジソングでは、福沢諭吉や小泉信三の教育理念が色濃く反映されていると言える。

しかし、日米開戦後に発表された「塾生壮行会の歌」と「塾生出陣壮行の歌」の歌詞は、戦前のカレッジソングと打って変わって非常に戦争色が濃いものになっている。「塾生壮行会の歌」の中の「本も閉ぢたよ ノートも置いた」という歌詞は特に象徴的なものである。しかし、この歌には「三田」や「義塾」「三色旗」など、慶應義塾を表す言葉が幾つも登場する。ここから戦地に赴いても塾生としての自覚や誇りを持って戦って欲しいというメッセージが読み取れるのではないかと考える。

また、学徒出陣で出征した上原良司や塚本太郎らが特攻直前に遺した言葉には、「愛塾心」を感じとることができるような言葉や表現が多く用いられている。

終戦から75年が経過し、戦争を語り継ぐ媒体が「人から物に」移行しつつあるこの時代、カレッジソングからも、慶應義塾の教育理念の変遷を読み解くことができる。大切に歌い継がれてきたカレッジソングをただ歌い継ぐだけでなく、そこから何を感じ、何を学ぶのかが、それを継承する我々の使命なのではないかと思う。

日吉キャンパスに輝く黄金色のイチョウ

☆小川万海子さんの講演「雪風に乗った少年」をきいて

ガイド　佐藤由香

27 回目を迎えた「横浜・川崎平和のための戦争展」、今年のテーマは「少年・少女と戦争～戦争遺跡から見えてくること」です。講演は『「雪風」に乗った少年～十五歳で出征した「海軍特別年少兵」』の編者である小川万海子さんをお招きしました。本書は、雪風乗組員：西崎信夫さんの体験記を基に、小川さんが西崎さんに取材し、まとめたものです。西崎さんの生い立ちや、雪風の魚雷発射管射手としての参戦詳細は、会ホームページよりバックナンバー（第 127 号・128 号）をご覧下さい。2016 年 4 月 9 日ガイド養成講座第 4 回にて講演いただいた、西崎さんご本人のお話を掲載しています。

講演からは、今次テーマである少年が戦争に関わらざるをえなかった現実を、海軍特別年少兵（以下：特年兵）という制度を通して知ることができました。まず、特年兵とは 1941（昭和 16）年海軍が中長期的な視点で未来の中堅幹部を育成しようと設立した制度です。採用年齢は 14 歳以上 16 歳未満。学校や役場を通じて優秀な人材を募集しました。試験は学科と身体検査。志願兵より高い水準が求められ、10 倍の難関だったそうです。

一般的な志願兵(満 17 歳以上）から一挙に低年齢化を図ったことにも驚きますが、こどもにとって一番身近な学校（先生）や、経済状況や家族構成を把握している役場が関わることにも、恐ろしさを感じます。わずか 15 歳の少年を「郷土の誇り」と地域全体が見送る中、「必ず生きて帰れ」と伝えたお母さまの言葉に胸を動かされました。お母さまの言葉は西崎さんの脳裏にも刻み込まれます。

第 1 期生は 3,200 名、西崎さんは 1 年半の基礎教育のため大竹海兵団に配属されます。海兵団の生活は、旧制中学 3～4 年程度の学科や軍事教練、カッター（小型ボートのオール漕ぎ）、水泳、各当番とタイトスケジュールに連帯責任（体罰）を負わされる厳しいものでした。西崎さんは辛いとか大変とか考える余裕もなかったそうです。しかし卒業を控えた海兵団長の視察で「戦場における軍人精神の神髄とは」と急に問われ、西崎さんは「生きて帰ることであります」と答えます。団長は頷いてそのまま歩みを進めたそうですが、思いがけず口をついた言葉に西崎さん自身も驚きます。海兵団で受けた教えよりもお母さまの言葉が西崎さんの心の中で生き続け、より所となっていたことに深い感慨を覚えました。

西崎さんは術科学校（海軍水雷学校）繰上卒業を経て、マリアナ沖海戦、レイテ沖海戦に沖縄水上特攻と主要海戦を生き残り終戦を迎えます。生還した理由ついては兵学校で餞（はなむけ）に贈られた言葉であり、座右の銘となる「人の嫌がることを率先してやる」を挙げました。人の嫌がることを実践した結果、様々な体験を通して、物事の本質を見ることができた。それらが戦時中の対応能力となったそうです。知識と知恵は異なるもの。情報の洪水の中で知識は得られるかもしれないが、知恵となると危ういものがある。これは、現在の私たちにも通じるお話です。ネットから情報があふれる時代、見極める力はより大切になりました。情報を無意識に選別したり、鵜呑みにすることがないよう、まずは体系的な知識を身につけること。私も日吉台地下壕のガイドを始める上で、知ることから始めました。3 年経った今も知る作業の途上ですが、この先に考えること、自分なりの意見を発していくことを続けていきたいと思います。

最後に特年兵は第 1 期～第 4 期まで 18,000 人採用されました。1971 年、生存者一同の手により「海軍特年兵の碑」が東郷神社（東京都渋谷区）に建立されます。毎年 4 月 15 日に亡くなった 5,000 名の鎮魂を願い、慰霊祭が行われています。

小川講師開始に先立ち
保存の会会長よりご挨拶

お知らせ

第 14 期ガイド養成講座始まる

運営委員　小山信雄

第１４期ガイド養成講座が１月 11 日（土）開講しました。今回は受講生の方３名（２名の男性と１名の女性）及び運営委員等 11 名による第１回目の講座となりました。会長挨拶に続き、初回ガイダンスということで、スライドを見ていただきながら、当会の紹介、活動の内容、慶應義塾日吉キャンパスの歴史・説明、地下壕見学会の様子等につき１時間を越えるガイダンスを行いました。休憩を挟み、事務手続きを中心とした見学会の流れ、見学会の成り立ち、慶應義塾との関係、等について説明を行ったあと、前期ガイド養成講座修了者の体験談・感想、そして受講者も含め参加者全員の自己紹介を行い、各自の保存の会、戦争に対する思いなどを熱く語って頂きながら、盛況の内に第１回の講座は終了となりました。

第２回は３月７日（土）「フィールドワーク」で艦政本部地下壕周辺など、日頃なかなか見学できない所を中心に行う予定です。第３回の４月４日（土）「戦争体験を聞く」では２名の方より戦争体験をお聞きする予定です。第４回は５月９日（土）「ガイド活動の実際・まとめ」として、ガイドの手引きを使ったガイドポイント説明、フリーディスカッションなど行い、修了証授与式を予定しています。

今年度も、出来るだけ多くの受講者の方が講座を修了され、ガイドとして参加していただくことを期待しております。

第 14 期ガイド養成講座初日（2020.1.11）
於：慶應義塾日吉キャンパス来往舎中会議室にて

戦争体験者のお話は公開講座です。
４月４日（土）１３時～１５時半
於：来往舎・大会議室
☆二瓶治代さん
　――東京大空襲体験・亀戸周辺
☆小野寺和一さん
　――少年通信兵・特務艦乗組み

どなたでも参加いただけます

戦跡をめぐるバスツアー
湘南地域の戦争遺跡を訪ねて
（見学先は現在検討中です）

日程：５月１７日（日）
ご案内：中田均さん
（浅川地下壕の保存をすすめる会）

連載　日吉第一校舎ノート（１７）　世界地図のカップ（その１）

会長　阿久沢　武史

ナチス・ドイツは、バウハウスを代表とするモダニズム建築を否定し、ヨーロッパの伝統に回帰するグリークリバイバル（古典主義建築）を好んだ。列柱を持つクラシカルな様式をベースにしながら、過度な装飾を排し、シンプルなデザインの近代的な新古典主義の建築群である。第一校舎は、対になる第二校舎を含め、その全体的な外観はなぜかナチスの建築に似ている。この類似性もまた、看過できない。

すでに述べたように、古典主義建築は「自由」や「民主主義」、「哲学」「数学」「論理」といった古代ギリシアに由来する豊かな人間性や知性に通じる。同時に整然と立ち並ぶ列柱とシンメトリカルな構成美は、「伝統」や「秩序」、「権威」や「権力」の象徴にもなりうるものであり、ナチス政権の威信を示す巨大な建築物として国家的事業に組み込まれていった。ただ、日吉キャンパスと第一校舎が構想・設計されていた昭和７年（1932）と８年（1933）は、まだナチス・ドイツから直接的な影響を受ける時代状況ではなかった。何より私学である慶應は、本来国家権力とは無縁の学塾であり、中條精一郎や網戸武夫が全体主義的な思想に与していたとも到底考えられない。竣工時、第一校舎は「雪白厳然たる近世アメリカンスタイル」（「日吉台第一期工事竣工す」『三田評論』第 441 号、昭和９年５月）と評されたように、やはり自由と民主主義の精神を体現するアメリカンボザールの影響を強く受けていると考えるべきであろう。しかしながら、ナチス・ドイツの建築との類似性が連想されるところに、この校舎の「宿命」とも言える履歴が、透かし絵のように浮かび上がってくる。

正面玄関に向かって左端の壁にあるアール・デコのレリーフの下には、世界地図を象ったカップがある。日本を中心とした地図であるゆえに、「大東亜共栄圏」を連想しやすい。それは、ここが戦時中に多くの学徒を戦地に送り出す場になり、海軍軍令部第三部によって使用され、寄宿舎に連合艦隊司令部が入り、その地下に巨大な軍事施設が作られたことが強く影響している。第一校舎が竣工した昭和９年（1934）は、軍部による大陸への進出が始まっていた時代であったが、まだ「大東亜共栄圏」という言葉は生まれていない。したがってここは、そうした戦時思想やナショナリズムからまずは切り離して考えるべきであろう。

カップの形象は、たとえば古代ローマの庭園を飾った聖杯型の大理石の壺、「ボルゲーゼの壺」を思わせる。ボルゲーゼの壺には、ギリシア神話の酒神ディオニュソスが描かれ、その源流は古代ギリシアでワインと水を混ぜるのに用いられた大型の壺（クラテール）につながる。古代ギリシアの饗宴の場に置かれた壺は、本来の用途から離れて、やがてローマの庭を飾る大理石の装飾品になり、はるか後世、遠く離れた東洋の島国の大学キャンパスに据えられた。そう考えると、このカップ（壺・聖杯）はパルテノン神殿を彷彿とさせる第一校舎と、まさに溶け合うように置かれているということになる。もともと古代ギリシアのクラテールには神話の神々や葡萄が描かれ、古代ローマのボルゲーゼの壺には酒神ディオニュソスが描かれていた。第一校舎のカップには世界地図が描かれている。神話から世界地図へ――ここにはいったいどのような意味が込められているのだろうか。

世界地図のカップ

※本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第 46 号（2015 年）に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート（二）クラシックとモダン」の再録となります。

連載

地下壕設備アレコレ（２６）
海軍特信班（敵通信傍受）大和田通信所跡を見学しました

運営委員　山田　譲

今回は地下壕ではないのですが、海軍大和田通信所のお話です。昨年８月６日に歴史教育者協議会の埼玉大会関連行事として、米軍大和田通信所、米軍所沢通信基地、旧陸軍所沢飛行場跡、航空自衛隊入間基地をめぐる現地見学会があり参加してきました。その中で今は米軍大和田通信所になっている施設は、かつて海軍の敵国通信傍受専門の受信所だった所です。日吉で何度か講演をしていただいた海軍特別年少兵で電信兵だった近藤恭造さんもこの大和田通信所に勤務していました。

現地には海軍通信所の正門の門柱が２本残されていました。高さ２ｍほどの直方体のもので、コンクリート製のようでした。また見ることはできませんでしたが、木製のアンテナ塔がまだ残っているそうです。これは米軍が戦後も使っていたそうです。今は米空軍の「第５空軍 374 空輸航空団通信隊」（Owada Receiver Site 374CS）となっていて、横田基地所属とのことでした。120 万㎡の広大な敷地には、さまざまな種類のいろいろな形をしたアンテナが立ち並び、ヘリポートもありました。米軍通信隊の建物は１階建の小ぶりなものですが、施設は大部分地下化されているそうです。敷地の一部は基地用地のまま、市の総合運動場になっています。

位置は埼玉県新座市西堀・本多と東京都清瀬市下清戸にまたがり、野火止用水が敷地内を通り、平林寺のすぐそばです。新座市には、ここより北の方に大和田という町名の所があり、私はここが所在地なのだろうと思っていましたが違いました。案内の方にお聞きしたところ、「ここはかつて大和田村だったので大和田通信所になった」とのことでした。

①、説明の中で驚いたのは「広島、長崎への原爆投下爆撃機のテニアン島離陸を海軍はここで確認していた」というお話でした。これは『原爆投下　黙殺された極秘情報』（NHK スペシャル取材班・新潮文庫）に書かれていることです。グアム、サイパン、テニアンを出撃する B29 は離陸する時、コールサイン（呼び出し符号）を出します。大和田では、これを丹念に追いかけていました。これによって B29 の本土空襲予測を立て、本土近くで発するコールサインの位置を方向探知し「何機が〇〇方向に侵攻中」と防空部隊に通知する。この探知作業は海軍と全く別個に陸軍もやっていました。陸軍特種情報部という部署です。

そのなかで「V600 番台」のコールサインを持つ部隊が５月おわりごろから登場しておかしな動きをした。これについて海軍軍令部通信課長だった鮫島素直大佐も「７月１９日、従来とは違った航空機呼び出し符号が傍受され、方位測定によりテニアンの部隊と推定。大和田通信隊ではこれを新任務部隊と判断した」という。これが広島に原爆を落としたのです。８月６日当日、この部隊が発進し広島方面に向かっていることが確認されました。しかし、その時、広島の空襲警報は解除されたままだったというのです。そのあと大和田通信所では、広島原爆投下機と同じ「特別な電波を使って」、数日後にテニアンから通信があったのをつかんでいました。これが長崎の原爆です。しかしこの時も空襲警報は発令されませんでした。大村にいた海軍航空隊（源田実司令官）にも、迎撃の出撃命令は出されませんでした。いったいどういうことなのかと思います。情報軽視といえばそれまでですが、大和田通信所でこんなことが起きていたとはおもいませんでした。

②、先ほど名前の出た鮫島素直氏は『元軍令部通信課長の回想』という本を出し、海軍通信部隊の全容をくわしく書いています。その中で大和田通信隊について「中央における通信諜報実施機関として…特設通信隊とし…大型受信機 23 台、小型受信機 200 台、方位測定機は長、中、短波それぞれを対象に計 15 台」を設備していたという。

「合衆国艦隊主要艦艇の送信電波をオシログラフを使って撮影収録の上、この波形の特徴により、呼出符号の変換を行っても即時にこれを見破る」ことができた。「19 年末以降のマリアナ基地からする B29 の本土来襲に際しては、ほとんど毎回、敵機の基地発進と同時に、その概略来襲機数と来襲予想時刻を諜知して関係各部署に通報」したという。

③、大和田通信隊に実際に勤務していた東大出身学徒兵の野原一夫氏は『回想　学徒出陣』という回想記を書いています。これによると「大和田通信隊は傍受部と方位測定部と判知部に分かれていた。」判知部は「通信解析を行ない敵情を判断する」。大和田に行ったのは昭和 19 年 10 月 20 日で、その時は教育実習だった。レイテ沖海戦の直前だった。12 月 25 日に少尉任官し大和田の判知部に配属された。米海軍司令部のホノルル放送の解析が仕事だった。

ここで野原氏は硫黄島への米軍上陸や大和水上特攻への米軍動向を傍受・分析していましたが、V 班（ボイス班）という無線電話を傍受していた班から、暗号にしていない平文の電話通話記録を受け取ったそうです。そこには「敵艦隊はヤマト以下 10 隻、進路何度、速力何ノット…」とあって「畜生！なめやがって」と怒ったそうです。その後、野原氏は鹿屋の第 5 航空艦隊司令部に転勤となり、そこでは白菊という練習機を特攻に使う状態でした。これをレーダーで探知した米軍は「奇妙な物体がいくつか海面上に見える。…飛行機にしてはあまりにもスピードがスローである。very slow, very slow」と無線電話で通話していたという。その後 7 月に、第 5 航空艦隊司令部は大分に後退しました。そこで広島に原爆を落としたことを伝えるサンフランシスコ放送を V 班が傍受しました。ソ連参戦を伝えるニューデリー放送も傍受しました。さらに 8 月 11 日にはポツダム宣言受諾申入れを、サンフランシスコ放送が報じるのを傍受していました。「Jap has surrendered. War is over.」

このように敵信班の将校たちは絶望的な戦況の行く末を、電波を通じて明確につかんでいました。しかし、そのことは国民や兵隊には一切知らされることはなかったのです。

大和田通信所正門の門柱

連載

海外戦跡めぐり（１３）タイの戦勝記念塔

～２大国に支配される国々に取り囲まれる中、独立を保ち続けたタイ王国も大国との戦争は避けられなかった～

運営委員　小山信雄

「微笑みの国」といわれるタイ。第二次世界大戦の時代、周辺のアジアの国の殆どが植民地化されて来た中、唯一独立を保ったタイは戦争と無縁とも思われがちですが、実際に戦争は行われ、犠牲者を慰霊する記念塔が首都バンコク市内に建てられています。昨年５月にタイを訪れる機会があり、戦勝記念塔（ビクトリー・モニュメント）を見学してきましたので紹介させて頂きます。

日米開戦（1941 年 12 月 8 日）の１年程前の頃、タイ王国は、イギリスの植民地である西の【英領ビルマ：現在のミャンマー】、南の【英領マラヤ連邦：同、マレーシア、シンガポール】、そして東のフランスの植民地【仏領インドシナ（以下、仏印）：ラオス】【仏印：カンボジア】に取り囲まれており、更に東隣には【仏印：ベトナム】がありました。従来タイの領土であった、世界有数の穀倉地帯であるバッタンバン平野（タイとカンボジアの中間に位置する）は【仏印：カンボジア】に領有されていた為、返還をフランスに対し求め続ける中、欧州においてフランスがドイツに敗れた（1940 年 6 月）ことを契機に、遂に外交交渉から戦争に発展することとなり、1940 年 11 月 23 日に両軍の戦端が開かれました。

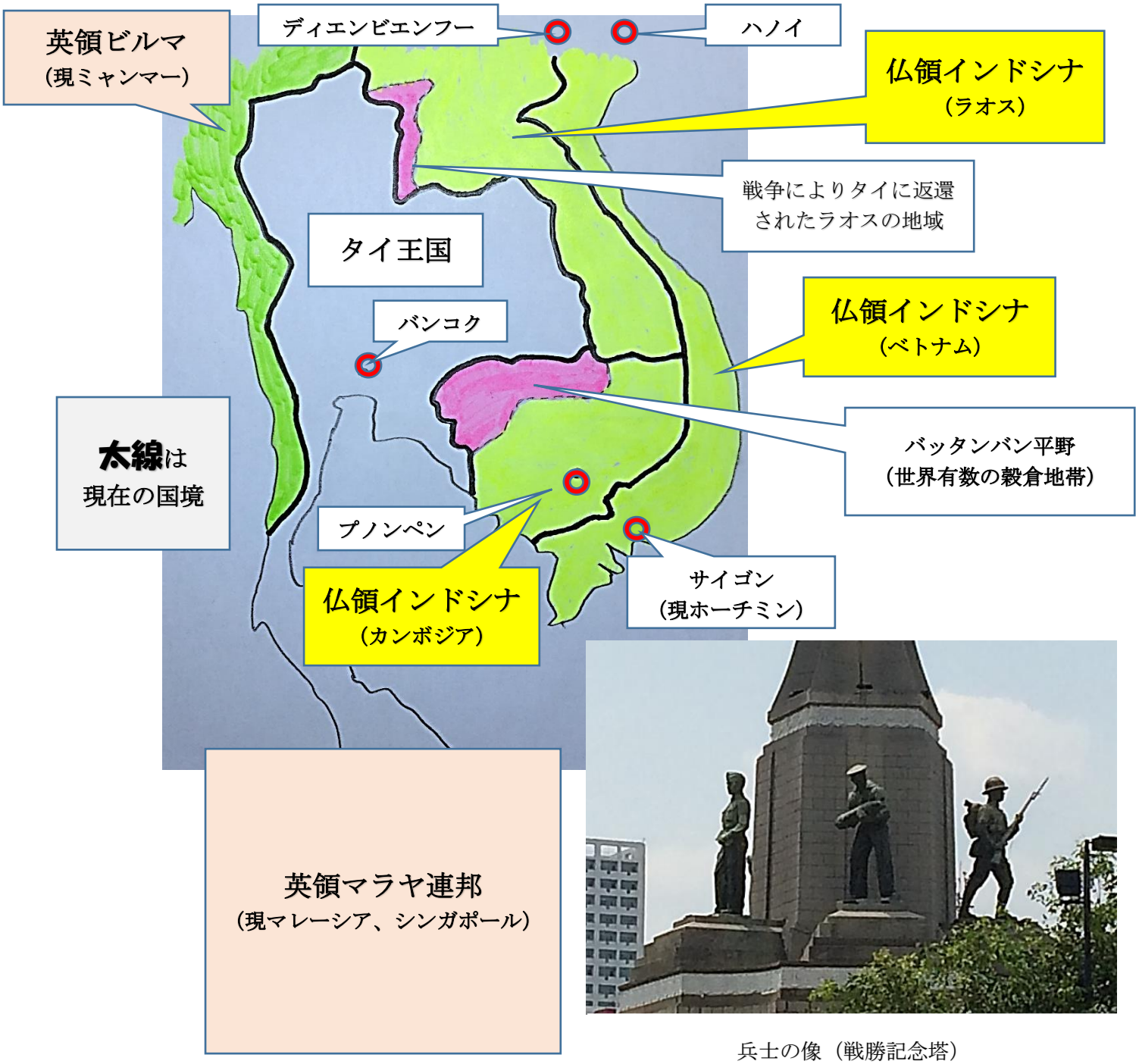
およそ３ヶ月に亘る戦闘（空爆の応酬、戦車による地上戦、軍艦同士の海戦等）でタイ・フランス双方に多くの戦死者や負傷者を出しながら収拾がなかなか付かない中、北部仏印進駐(1940 年 9 月)、南部仏印進駐(1941 年 4 月)と東南アジアで勢いを増す日本により斡旋が行われ、1941 年 5 月 9 日に紛争両国は、東京にて終戦協定に調印することとなりました。

戦勝記念塔（Victory Monument）
塔の奥に高架鉄道路が見える

バッタンバン平野（およびラオスの一部地域も含む）はタイに返還され、この戦争で犠牲となったタイ陸海空軍兵士、警察官、民間人等 59 名の慰霊、及びフランスからの勝利を記念して、1941 年にこの記念塔が建立されました。現在は、記念塔の真ん前に同名（Victory Monument）の高架鉄道駅が敷設され、各地方へ行く小型バスの発着場ともなっており、夕方になると沢山の屋台が並ぶ、庶民の憩いの場にもなっています。

タイはこの戦争に勝利したものの、バッタンバン平野等は連合国側の勝利国となったフランスに再び戻されることになりました。

インドシナ半島（狭義では、カンボジア、ラオス、ベトナム）におけるフランスの支配は、1954.5 の完全撤退（ディエンビエンフーの戦いでの敗北）迄続きましたが、その後米ソのベトナムへの介入で、インドシナ半島に平和が訪れる迄には、更に 20 年余りの歳月（1975.4 サイゴン陥落によるベトナム戦争の終結）が費やされています。



兵士の像（戦勝記念塔）

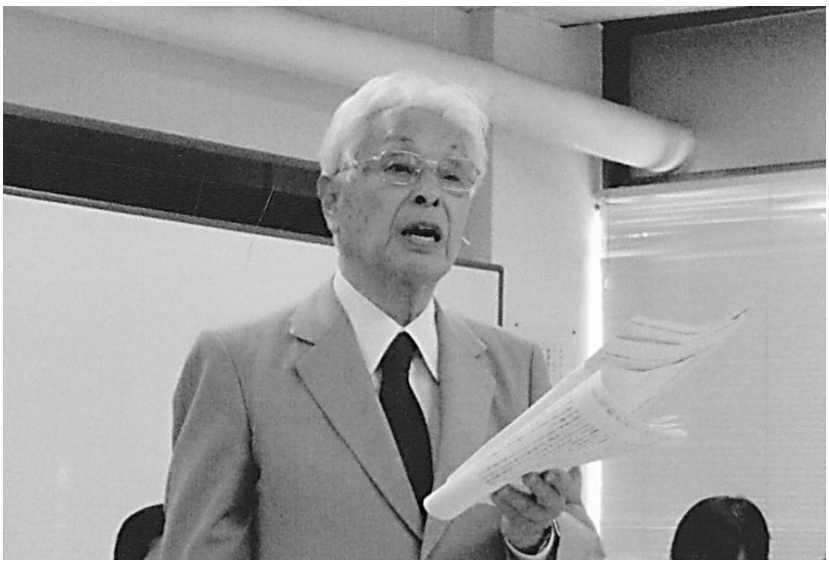
☆ディエンビエンフーの戦い：ラオス国境近くのベトナム山岳地帯で起こったベトナム人民軍とフランス軍（主に外人部隊）の戦い。双方で約１万人の死者を出し、フランス軍が敗北。この結果、19 世紀後半から約 70 年間続いたフランスによるインドシナ支配は終了となるが、以降、米ソの介入を招き、ベトナム戦争につながる。

☆サイゴン陥落：1975 年 4 月 30 日、南ベトナムの首都サイゴンが北ベトナム軍に包囲され米軍はベトナムから撤退となり、およそ 10 年に亘ったベトナム戦争は終結となった。

聞き取り

山の手大空襲と戦時中の体験―田中昭雄さん、禮子さんのお話

運営委員　山田　譲（記）



田中昭雄さん
2019 年 6 月 16 日「山の手空襲を語り継ぐ集い」にて

田中昭雄さんは戦前から渋谷区神宮前 3 丁目（現在の青山キラー通りのそば、原宿教会の隣）にお住まいで、1945 年 5 月 25 日の山の手大空襲の時は港区芝の正則学園中学 3 年生でした。戦後、青山学院高等部の国語の教員を勤め、青山には縁の深い方です。現在 89 才で、「山の手空襲を語り継ぐ集い」を毎年開催する実行委員をされています。田中禮子さんは福島県相馬出身で、昭和 28 年、昭雄さんと結婚されて上京されました。89 才です。現在お二人は練馬区にお住まいです。山田譲、淑子が昨年 10 月 21 日に自宅にお伺いして、お話を聞かせていただきました。

◆田中昭雄さんの空襲･戦争体験―焼死体、水死体を片付け

青山の青南小学校の卒業なので同級生や卒業生は当時、青山に住んでいてみんな山の手大空襲の体験者です。「山の手空襲を語り継ぐ集い」は泉宏さん佐藤銀重さんが中心ですが、泉さんも青南小の同期生です。体験記の本『表参道が燃えた日』を編集した長崎美代子さんも同期です。ただ当時は男女別クラスでした。運動会だけ一緒でした。私は 4～5 年前に誘われて、長崎さんが公立の学校にこの本を配りに行くのを手伝いました。青山の善光寺での供養の会にも参加し、その時「原宿の唯一の経験者」（神宮前の以前の町名は原宿）と言われ「加わってほしい」と言われて始めました。

空襲の時は自分の家も学校（正則中学）も焼けてしまいました。今の神宮第 2 球場（当時は相撲場）が町内会の避難所になっていましたが、途中にある近衛歩兵第 4 連隊（当時は第 6 連隊に改称）の通用門（裏門）を閉じていて入れてくれない。人が 30 人位集まって「開けてくれ」と言うと兵隊が「聞いてくる」と言って聞いてきて、それでやっと開けてくれました。その翌日に、煙で目をやられていたので目をショボショボさせながら帰ってきました。原宿教会の山田美代子さんと伊藤ハルさんもいました。

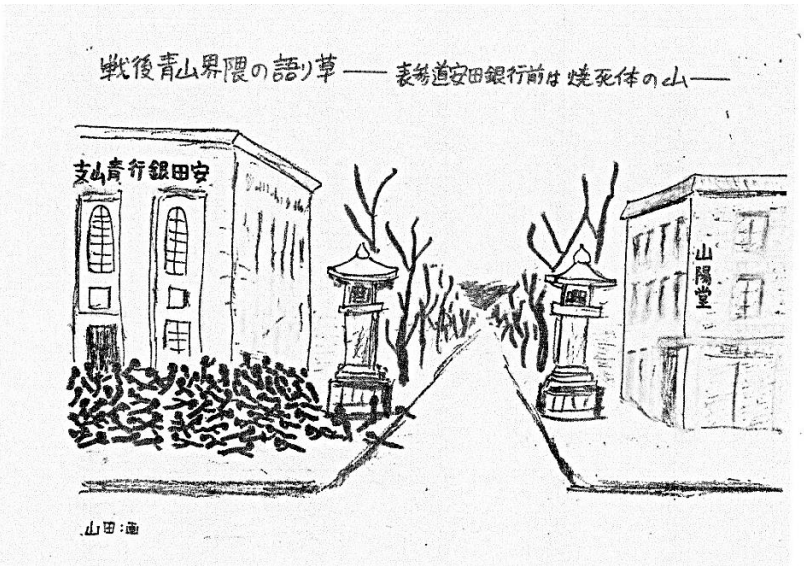
北側の熊野神社のそばに防火用水（貯水槽）があり、そこに人が大勢飛び込んで亡くなっていました。みんな荷物を背負っていて、用水槽は人の背より少し深く、つかまる所がなくておぼれていました。隣組の人に「助けに来てくれ」と言われて死体を引き上げましたが重くて大変でした。荷物を背負っているのでなおさらでした。

一度、家にもどり、そのあと表参道を見に行きました。安田銀行（現・みずほ銀行）の前で大勢死んでいました。兵隊がトラックで死体を運んで、だいぶ片付けてありましたが少し残っていたのを、「手伝ってくれ」と言われて死体をトラックにのせました。重かったです。表参道の途中にも死体がありました。当時、自分は軍国主義でこり固まっていましたが、「負けているんだな」という感触をおぼえました。

家の庭に防空壕を２つ掘りましたが、１つは燃えてしまいました。残った１つでしばらく過ごしましたが、梅雨になって水浸しになってしまいました。

当時、中学 2 年くらいから勤労動員で同盟通信（現・共同通信）の発送部で働いていまし

た。会社は日比谷公園の一角で、そこから通信文を自転車で陸軍省、海軍省や政府に届けました。通信社の腕章をつけているので、警官にも止められませんでした。通信社の農場が京王多摩川にあり、馬に乗って放牧の牛の世話をしたりしました。社長は古野伊之助さんで社長や家族と話をしたり、泊めてもらったこともありました。しかし敵機の機銃掃射を受けたこともあり、一人か二人、死にました。京王線で通っていました。



空襲の後も勤労動員をしていましたが、学校も焼けてしまったので福井の永平寺の近くの叔母の家に 1 ヶ月くらい行っていました。8 月 15 日の終戦の時は青山にもどっていて、京王多摩川の農場にいました。帰りの電車で将校が「お前たちがたるんでいるから負けたんだぞ」と叫び、刀を振り回すと怖いからだまっていました。

その後、学校にもどったのは半年くらい後で、4 年生の時、国学院の予科に入り昭和 27 年に卒業して福島県の相馬高校で教師になり、そこで禮子と知り合いました。

◆田中禮子さんの戦争体験
—忘れられない叔父さんとの別れ

女学校に行っていましたが授業はなくて、松の根を掘っていました。これは負けると思っていました。勤労奉仕で原町の飛行場の石運びをしました。女学生が来たので兵隊さんが喜んで、みんなで歌を歌ったりしました。畑仕事もして田植えや稲刈りもしました。自分の家は商家で畑仕事はしたことがなかったので、うまくできませんでした。

空襲警報が鳴ると城跡の林に逃げることになっていて、これは訓練だけでおわりました。空襲にはあいませんでした。学校の先生も召集になり、40 才位まで召集されるようになりました。それで父も覚悟していましたが終戦になり、兵隊に行かずにすみました。近所の人も召集されましたが、2 人帰ってきました。

父の一番下の弟（叔父さん）、斉藤清蔵さんの忘れられない思い出があります。叔父さんは仙台師団の看護兵で一等兵だったのではないかとおもいます。戦地に行く列車の通過予定を知らせるハガキが来て、時間と通過する踏切を指定してありました。みんなで待っていると列車の窓の木の鎧戸がひとつパッと開いて、叔父さんが手を振り、袋を踏切の道に投げました。その時、夕日があたった顔がはっきり見えて涙が光っていました。みんなで叔父さんに手を振りました。袋にはお菓子がいっぱい入っていました。そのあとビルマからハガキがきました。

昭和 17 年渋谷区詳細図

しかし終戦後に戦死の知らせが来ました。昭和 19 年戦死で 25 才でした。白木の箱が届けられましたが、石が入っていただけでした。「バカにしている」と母が怒っていました。戦後、近郷の人で上官だった人が「叔父さんは空襲があり、危険なのに兵舎の書類を取りに行って直撃弾でなくなった」と教えてくれました。戦後になって知らせがあったので葬式を寒い時にやりました。

〈付記〉山田美代子さんの青山空襲体験についての覚書（兄・山田義造氏記）

「昭和 20 年 5 月 25 日、妹美代子は原宿教会の保母に就任していました。原宿同胞幼稚園は戦時中、文部省令により「原宿戦時保育所」となっていました。…神牧師は召集令状を受け、郷里米子に帰省中、伊藤ハルさんと妹美代子二人で原宿教会の留守番をしていたのです。

25 日突然の大空襲。二人はかねてより予定していた神宮外苑絵画館前の噴水のあるところまで逃げたのです。途中熊野神社まで来ると両側の家は全焼中、近衛歩兵 4 連隊の裏門へようやくたどりつきました。しかし門は閉じたまま、守衛兵がきびしく見張りをしていて入ることができません。その隊も焼けはじめ、守衛兵はようやく門を開け、入ることができ、焼ける兵舎の横を通り抜け、神宮球場正門までたどりつくことができ、さらに絵画館噴水前まで焼ける建物を横に見ながらたどりつき、そこで一夜を明かしたのです。

翌日は熊野神社付近にたどりつくまで近くの家の火の粉がとびちり目に入り、半泣きで伊藤ハルさんに手を引かれて神社横まで来ると道路が急に拡がっており、その道路上に大きな防火水槽があり多くの人が死んでいました。妹がよく見ると幼稚園児も二人黒焦げになって浮かんでいたのです。伊藤さんと二人、苦労して引き揚げてやりました。

原宿教会まで帰ってくると教会周辺の家々も皆焼け落ちて……後日（1 年半程度後）私が中国から引き揚げ最初に教会についた時は、小さなバラックの会堂兼寝部屋が一つ。……教会周辺の家屋はほとんどない。教会横の田中さん、裏の渋谷さん、表隣の遠藤さん、北隣の吉田さん等すべて焼失していたのです。

伊藤さんと妹は、幼稚園の半円型の運ていの太鼓橋にゴザなどをかけ、その下でかなり長期間過ごしたようでした。」

（『原宿教会だより』2012 年 9 月 30 日号に掲載）

港北今昔こぼれ話

慶應日吉キャンパスを接収したアメリカ軍
―銀杏並木の正門には鉄兜のＭＰが立つ―

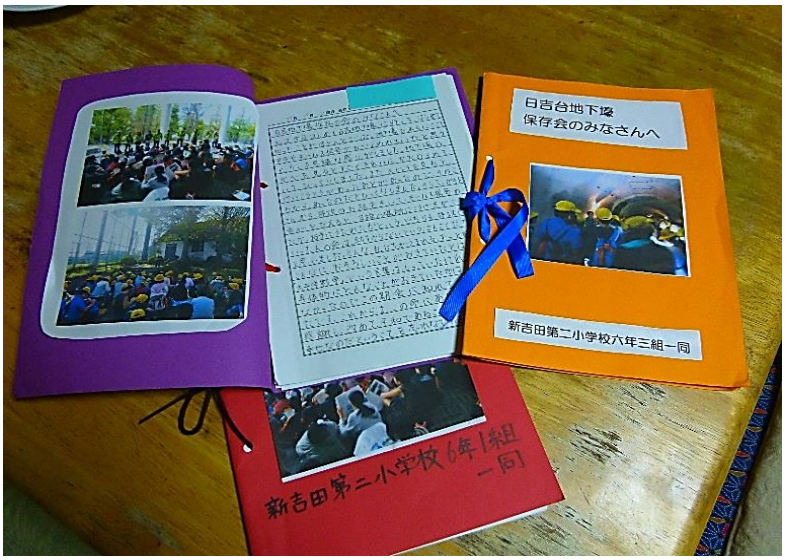
副会長　亀岡敦子

1950 年頃の日吉台小学校校庭（奥にコンクリートの防空壕が見える）
『戦争遺跡を歩く　日吉』より

139 号で日吉台国民学校の、校区内にある真福寺と興禅寺への奇妙な学童集団疎開について書きました。学童集団疎開対象外の一、二年生はどうしていたのでしょうか。昭和 20 年 4 月に日吉台国民学校に入学した一年生は自宅から通学していたとのことです。19 年 9 月からは、東洋一といわれた校舎は海軍省功績調査部が使用していました。功績調査部の詳細はまだ分かっていませんが、軍人らしい姿は見なかったそうです。

日吉を襲った４月 15 日の空襲で学校が全焼したため、その後は神社や公民館のようなところで細々と授業を続けたようです。教室不足がさらに深刻になったのは、疎開をしていた上級生が学校に戻ってからでした。何とか一か所で授業をしたいとの切実な願いから、慶應義塾大学の体育会の部室を借りることにしたのです。体育施設の多くはマムシ谷と呼ばれる校地東側の低地にあり、テニス部などの部室や剣道場、空手道場などがありますが、低地であるため、連合国軍の接収を逃れていたのです。日吉台小学校編『創立百周年記念誌』には、その頃の大変だった様子が描かれています。ただ体育会部室での授業を体験した学年は、2, 3 年しかいないため、このことはほとんど知られていません。

戦争が終わり、やっと海軍から学生の手に戻るかと思った矢先、連合国軍が接収することになりました。９月８日には早々とアメリカ軍が進駐してきて、銃を手に、鉄兜を被った大きなＭＰがふたり、正門の両脇に立っていたそうで、その姿は大変怖かったと体験を話してくれた麻生美幸さんは言います。キャンパスに入れないので、マムシ谷の教室まで通うには、綱島街道を綱島方面に歩き、消防署のわきの道を左折し、チャペル近くの門から入り、第一校舎のそばまで行くと、そこにも銃を構えたＭＰが立っていました。そのわきを通り、階段を下まで降りて、やっと教室についたとのことです。それでも、小学生は野山を駆け回って遊び、楽しい毎日を過ごしたと懐かしそうに話してくれました。



新吉田第二小学校６年生のみなさん
からいただいた感想文集

日吉キャンパスは、戦中は海軍が戦争遂行のために使い、戦後はアメリカ軍が占領政策のために使いましたが、アメリカ軍と同時期に同じ場所で、日吉台小学校が新しい教育の場として使っていました。この不思議な同居は、昭和 24 年 10 月 1 日に米軍の接収解除される日まで続いたかどうか不明です。そのころには、焼け残りの廃材を工面して建てた校舎が全学年使用可能となっていたようで、すでに小学生の姿はなかったかも知れません。

矢上小学校６年生地下壕見学会（2019 年 12 月 3 日）チャペル前

活動の記録　２０１９年１０月～２０２０年１月

１０／１４㈪　体験者の聞き取り　小野寺和一さん（大倉山ガスト）
１０／２４㈭　会報 140 号発送（来往舎 205 号室）
１０／２６㈯　定例見学会　57 名
１１／６㈬　地下壕見学会　藤沢市高倉中学校１年生・先生 152 名
１１／１１㈪　横浜市教育委員会文化財課・環境創造局緑地保全課と面会（横浜市役所）
横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会（法政第二高校教育研究所）
１１／１３㈬　定例見学会　40 名
１１／１４㈭　運営委員会（来往舎 205 号室）
１１／１６㈯　定例見学会　46 名
１１／１９㈫　地下壕見学会　新吉田第二小学校６年生・先生　84 名
★3 クラスから感想文をいただきました。書かれた質問には、ガイドからお返事をします。
１１／２７㈬　地下壕見学会　慶應義塾高校見学会　43 名
１１／２８㈭　第 27 回横浜・川崎平和のための戦争展　会場準備（来往舎イベントテラス）
１１／２９㈮・３０㈯　第 27 回横浜・川崎平和のための戦争展開催（来往舎イベントテラス・シンポジウムスペース）
29・30 日　展示（イベントテラス）日吉台地下壕保存の会、登戸研究所保存の会、川崎・中原の空襲・戦災を記録する会、みやまえ・東部６２部隊を語り継ぐ会、市民が描いた戦争の記憶
30 日★若者の発表　日吉台中学校演劇部による朗読劇・慶應義塾高校生による研究報告
★講演「ある海軍特別年少兵の生き抜く力『「雪風」に乗った少年』を語る」講師小川万海子さん　★主催団体からの活動報告
１２／３㈫　地下壕見学会　矢上小学校６年生・先生　110 名
慶應義塾大学日吉キャンパス蝮谷通路道路工事（旧海軍航空本部等地下壕蝮谷側３ａ出入口付近）の見学　運営委員４名
１２／１１㈬　定例見学会　62 名
１２／１３㈮　地下壕見学会　駒林小学校６年生・先生　101 名
１２／１４㈯　ガイド学習会（菊名フラット）
１２／１８㈬　地下壕見学会　下田小学校６年生・先生　112 名
１２／２１㈯　定例見学会　48 名
１／８㈬　定例見学会　11 名
１／９㈭　運営委員会（来往舎 205 号室）
１／１１㈯　第 14 期ガイド養成講座第１回（来往舎中会議室）

★地下壕見学会について（予約申込が必要です）
定例見学会は毎月２回実施（原則として　第２水曜日 10 時～12 時 30 分・第４土曜日 13 時～15 時 30 分）１／２５㈯・２／５㈬・２／２２㈯・３／１１㈬・３／２８㈯　を予定しています。
★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで　Tel/Fax　045-562-0443　喜田（午前・夜間）

連絡先（会計）亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15　℡ 045-561-2758
（見学会・その他）喜田美登里：横浜市港北区下田町 2-1-33　℡ 045-562-0443
ホームページ・アドレス：http://hiyoshidai-chikagou.net/

日吉台地下壕保存の会会報　（年会費）一口千円以上
発行　日吉台地下壕保存の会　郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表　阿久沢　武史　（加入者名）日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会